

ディケンズ・ソサエティ・シンポジウム
Dickens Society Symposium in Lowell, MA, USA
(13-15 July 2012)

(報告) 武井 暁子

Akiko TAKEI

本学会は、今年世界各地で開催されているディケンズ生誕 200 周年記念学会の一つである。主催者のディケンズ・ソサエティは 1970 年創立で、1902 年創立のディケンズ・フェロウシップに比べて歴史は短いものの、DF と並び、ディケンズ研究の要となる学会だ。同会は北米とヨーロッパで交互に年次大会を開催しているが、今年は節目の年ということで、7 月にローウェル、9 月にカンタベリーにて学会を開催するはこびとなった。

開催地のローウェルはボストンから北西に電車で 40 分の場所にある。マサチューセッツ大学ローウェル校 (以下 UML と略記) があり、ケルアックの出身



会場となった Boott Events Center はこの博物館の別棟にある

地でもある。ローウェルは19世紀に繊維工業の中心地として栄え、1842年1~6月にディケンズが渡米した際に、連日の舞踏会や晩餐会に食傷気味だったディケンズは当地の繊維工場を見学した(この時の訪問は、ディケンズとアメリカの愛読者の双方に必ずしも幸をもたらしただけではなかったが、今ではボストン近郊在住のディケンズファンはディケンズのアメリカ来訪を誇りにしている)。20世紀に入ると繊維工業は衰退したが、現在工場地帯は復元され、Lowell National Historical Parkという名称の歴史地区になっている。学会の会場となった Boot Events Centerはこの地区の一角にある。

7月13~15日までの3日間の学会で、パネルが8つあり、計20の発表が行われた。クロスセッションではなかったため、国際学会では稀有なことであるが、全ての発表を聞くことが出来た。以下、筆者の印象に残った発表を発表順に紹介したい(作品名は略記する)。

1日目(7/13)のJoanna O'Leary (Rice University)、“Two for One?: Twins and the Anxieties of (Re) Production in Dickens”は、SB, NN, DC, LD, MEDに登場する双子の描写を分析し、背後にはマルサスの『人口論』(1798)に影響された人口増加への恐怖と、双子誕生のメカニズムが解明されていなかった時代ならではの生命の不思議に魅了される気持ちという、相反するディケンズの感情があるのではとの趣旨だった。ディケンズ作品の分身の問題は、例えば、今や必読となったモイナハンの論文(1960)や、ジルマン & パタンの論文(1985)が知られているが、筆者が知る限り、双子の問題を扱ったものは稀有なため面白かった。

2日目(7/14)はディケンズ中期から晩年の作品について4つのパネルがあり、充実した発表が多かった。David Bordelon (Ocean County College)、“The Radicalization of the Workers: *Hard Times* in Nineteenth-Century America”は、アメリカでのHT連載時には、挿絵でブラックプールがよりラディカルな感じに描かれており、資本主義が持つ冷酷かつ非情な側面が強調されていることを、豊富な画像資料を使い証明した。アメリカでのディケンズ作品の連載については一次資料を入手することが困難なだけに興味深かった。

Susan E. Cook (Southern New Hampshire University)、“Re-Visioning Dickens: Phiz and the *Bleak House* Illustrations”は、まず、BHのヒロイン、エスタが描かれている17枚の挿絵のうち、10枚では徹頭徹尾控えめに描かれ、残りの7枚では横顔か影のみの描写であり、エスタの自己卑下や内気さと呼応したものであると論じる。しかる後に、エスタの幼少期の「友」が人形のDollyであることを指摘し、ドリーのコピーと思しき人形が「大法官記憶から写し取る」(“The Lord Chancellor Copies from Memory,” ch. 3)、「約束の時間」(“The Appointed Time,” ch. 32)、「トム・オール・アローンズ」(“Tom All Alone's,” ch. 46)の3枚の挿絵で首

つり死体になぞらえられるところから、Phizはエスタに隠された腹黒い一面を描き出し、テキストの書き換えを行ったとの結論に至った。ドリーがエスタの分身の役割を果たすことが論じられていないのでやや強引なきらいもあるが、挿絵の綿密な分析を行い、ディケンズ作品でもっとも不人気なヒロイン、エスタの新しい読みを提供しており、得るところが多かった。

Goldie Morgenthaler (University of Lethbridge), “Fanny Dorrit and the Glittering Stage: Economics and Dance in *Little Dorrit*” は、ヴィクトリア朝では、踊り子には肉体的魅力を武器に社会的上昇を目論む計算高い女性とのイメージが付与されていると述べた。そして、ファニーを『ジェイン・エア』(1847)のセリーヌ・ヴァランス、『虚栄の市』(1847-48)のヒロイン、ベッキー・シャープの母と同列の望まぬ女性/母親に位置付け、ファニーがマードルに貸すペンナイフが彼の自殺に使われることや、自分の子供をエイミに任せきりにしていることは、ファニーの危険性や自己中心性の証であるとの趣旨だった。LDといえは監獄や経済を論じることが圧倒的に多いことと、ファニーはLDの女性の中でも批評の対象になることが非常に少ないため、意外性があった。

最終日(7/15)の発表では、Lillian Nayder (Bates College), “‘He has a Moustache’; or, ‘Earth Will Not Hold Us Both’: Charles Dickens and the Problem of Fred” が秀逸だった。論旨は、ディケンズの弟フレデリックはディケンズの父ジョンと同様金銭感覚が欠如しているにもかかわらず、魅力ある人物だったので、キャサリンはフレデリックと結婚していればよかったのかもしれないという仮定の下、ディケンズと不肖の弟フレデリックの関係はLDのドリット氏とフレデリックの関係に投影されているのではないかと推察するものだった。ネイダー氏は2010年に*The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth*を上梓しており、その蓄積に基づいた説得力のある発表だった。

筆者は最終日に“Alcott’s Rewriting of Dickens in *Little Women*”と題する発表を行った。オルコットは少女時代からディケンズの愛読者で、代表作の*LW*にはディケンズ作品や登場人物への言及が多数ある。オルコット研究者にとって、オルコットのディケンズへの崇拜は基本的知識なのだが、逆はまた真ならずで、ディケンズ研究者はディケンズとオルコットの関係にほとんど関心を持つことはなかった。筆者は、その点をまず明らかにし、*LW*でディケンズ作品や登場人物への言及が果たす役割、次にディケンズ、オルコット、*LW*のヒロイン、ジョーに共通する思春期の読書体験と作家としてスタート地点に立った時の喜び、そして、女性の自活や慈善活動への参加、女性の性格設定における両者の相似と差異を論じた。ネイダー氏や Joel Brattin, Jerome Meckier, Natalie McNight といった著名な研究者にコメントをいただいたことは良い体験になった。



筆者の発表

研究発表を包括的にみると、ディケンズとアメリカ関連に少し偏っている感もあったが、発表者の多くが院生を含む若手から中堅層の研究者だったためもあるのだろうか、奇をてらわないが、力の入ったものが多かった。挿絵を資料として使った発表も数件あり、パワーポイントが使われたが、最近日本の学会で多く見られるようにスライドショーに終始するという事はなかった。発表時間 20 分も概ね遵守され、大幅な時間超過はなかった。この点は日本の学会が見習うべきところかもしれない。

研究発表と同時に、国際学会の楽しみは様々なイベントである。本学会でも、ランチタイムを利用してのローウェルウォーキングツアー、歓迎パーティ、ディナーなどが催された。学会中のローウェルは空気こそ乾燥していたが非常に日差しが強く、ウォーキングツアーでは消耗した。しかし、風光明媚な UML 南キャンパスでの歓迎パーティ、和気藹々とした雰囲気でのディナーは大いに満喫した。すべてのスケジュールを順調に執り行った主催者、特に UML スタッフには感謝したい。

今回の学会に参加して感じたことは、欧米の研究者と比べ、日本のまともな英語圏文学研究者の研究内容は決して引けをとらないということだ。例えば、好み、スタンスの違いはあるだろうが、批評理論の研究と援用は日本の研究者のほうがよほど熱心に行っている。後は、英語での発信力が加われば、日本の研究者は海

外の研究者と互角の成果が出せるはずだ。筆者もこの学会での経験を生かし、今後更なる精進を重ねたい。



歓迎パーティ（右端が筆者）



ディナー（右端が筆者）